



## ジェニファー・アッカーマン氏インタビュー 鳥の知性について

これまで長らく、鳥は本能に従って行動しているだけだと考えられてきた。鳥の脳は非常に小さく原始的で、単純な思考しかできないとされてきたのだ。しかし近年の研究により、従来考えられていたよりもはるかに高い知能を持つことがわかってきた。問題解決や計画ができ、驚異的な記憶力を持ち、人間の子どものように先例から学ぶことができる。人の顔を識別でき、会話のような意思疎通さえできる。そうしたことを、クルミの殻に収まるほどの小さな脳で行っているのだから、驚嘆するほかない。

(中略)

過去100年間、鳥には知能の基盤となる脳の仕組みがないといわれてきた。高等霊長類である私たち人間の脳には、互いに情報をやり取りする6層構造の大脳皮質がある。高度な知能を持つにはこうした層状皮質が必須であり、それなしには知能を育む神経細胞間の情報伝達は成立しないと考えられてきたのだ。しかし、1世紀前の解剖学的観察を論拠とするこの定説は、大きな誤りだった。

(中略)

2000年代初頭以降、鳥類が霊長類に匹敵する知能を持つことを示す、驚くべき知的行動に関する研究報告が相次いで発表された。例えば、ヨウム(オウムの仲間)のアレックスは、何百もの言葉を理解し、発話するだけでなく、それぞれの言葉の意味も理解した。カレドニアガラスのベティは、針金を曲げてフックを作り、プラスチックチューブの底に置かれた餌入りの容器を引き上げた。

(中略)

こうした観察事例を受けて、鳥の脳についての定説が見直された。人間のような大脳皮質はなくとも、似た働きをする高度な情報処理システムを持つと考えられるようになったのだ。

(中略)

動物の認知機能をめぐる研究には、極めて多くの変数や要因が絡んでいるため、知能を測定可能かどうか、またどのように測定すべきかについて、様々な議論がある。私たちは本質的に非常に人間中心的な生き物であり、自分たちの知能こそが基準だと考えがちだ。しかし実は、動物の世界には私たちの理解を超える知性が存在しており、人間が測定するのは非常に難しいだろう。

(中略)

人間が方向を見定める能力は非常に限定的なものだが、それに比べて鳥類は、極めて高度なナビゲーション能力を持っている。(中略)それを証明するために、渡り鳥を遠くに運んで放す実験が行われてきた。ミヤマシトド(スズメの仲間)の実験もその一例だ。渡りの移動経路上である西海岸で小規模の群れを捕まえ、約4,800km離れたニュージャージー州プリンストンまで飛行機で運び、放した。すると数時間後には、本来の越冬地である南カリフォルニアやメキシコへと、迷うことなく一直線に飛んでいったのだ。過去一度しか渡りを経験していない若鳥さえも、コンパスやGPSなしで目的地とその道筋を把握していたという。このテストに合格できる人間などいないだろう。

Ackerman, Jennifer. "Brilliant Bird Brains." *On Point with Meghna Chakrabarti*. By Tom Ashbrook. NPR/WBUR. April 12, 2016. <https://www.wbur.org/onpoint/2016/04/12/bird-brains-science-avian> (ジェニファー・アッカーマン 「トム・アシュブルクとのインタビュー」 2016年4月12日 ナショナル・パブリック・ラジオ)



柴田是信 《烏鷺図屏風》(部分) メトロポリタン美術館